

特集「コミュニケーションの基礎・基本」

コミュニケーションの基礎・基本 定着のための授業

重松 靖

(東京都小平市立上水中学校教諭)

1. はじめに

NEW CROWN の代表著者である森住衛先生が、以前、「コミュニケーションにおいて必要なことは、相手に伝えたい内容を持っていること。次にその内容を伝えたい欲求があること。最後にそれを伝える手段である言語を知っていること」と言ったことがある。まさにその通りであると思う。

では、そういった力を持つ生徒を育てるには、どんな授業を展開していけばよいのか考えてみたい。

2. Teaching English in English

生徒にとって一番身近な英語の授業を、コミュニケーションの場にしてはどうだろうか。授業の始めと終わりの挨拶は英語でしているが、授業そのものを英語で進めている先生方はまだまだ少ないのではないかな。

挨拶の後に、What's the date today? / Is anybody absent today? / Why is he or she absent? Oh, that's too bad. / You were absent yesterday, but are you all right today? That's great! / I watched a baseball game last night. It was exciting! Did you watch the game? などと会話してみたり、classroom English を多用するのもいいだろう。また、新しい文法事項や構文を英語で導入したり、教科書本文の内容を oral introduction で導入することもできる。その際注意したいことは、form を定着させるドリルの段階は別として、文法上の誤りをいちいち訂正したり、言い直しさせたりしないこと。What time did you get up this morning? に対して Seven. と答えられればいいのではないかな。

英語をコミュニケーションの道具として使っていれば、How are you? と生徒に聞かれ、I don't feel so good. と答えたときには、自然に That's too bad. と言ってくれるようになるはずだ。

3. 沈黙は金ではない

英語で生徒に質問したとしよう。生徒は答えられないと mysterious Japanese smile を浮かべて黙り込んでしまうのが普通である。この笑いは「意味のない笑い」であって、暖かみを与えコミュニケーションを円滑にする働きなどまったくない。私は生徒に、「沈黙するな。自分が今どういう状態にいるのかを英語で表現しなさい。そうでないと、コミュニケーションが中断してしまう! 」と言っている。つまり、

* 相手の言った英文が聞き取れなかった

Pardon? / Excuse me? / Please say it again. etc.

* 質問は理解できた、今答えを考えている

Well..., / Let me see.

* 質問の意味がまったく理解できない

Sorry, I don't understand you.

* 答えを忘れてしまった

Sorry, I forgot.

生徒数の減少で学校でも空き教室が増えてきた。本校では、3年前から「英語科教室」を設け授業を行っている。上記のような表現や、Excuse me. How do you spell ~? / Excuse me. How do you say ~ in English? / Thank you. You're welcome. など生徒が授業の中で使いそうな表現を教室の壁面に掲示している。未習・既習に関係なく、1年生でも使う生徒は多い。

4. 評価の工夫

人間だれでもほめられれば嬉しいし、誤りを指摘されれば嫌なものである。われわれ教師は、ともすると文法的な誤りのみを評価の規準とし、内容や意欲を評価しないことが多い。生徒に積極的に英語を使わせようとするならば、この活動(問題)では何を求めているのかをはっきりと生徒に示し、その観点からのみ評価したり、一つの活動

(問題)に対して複数の観点から評価すべきではないだろうか。

たとえば、「書くこと」の評価の観点を私は、要求された課題を達成できたか、意味の通じる英文か、文法的に正しい英文か、語彙や表現・内容は豊かか、の4点にしている、また「スキット活動」の発表においては、適切な音量か、お互いの目を見ていたか、発音やリズム、イントネーションが自然か、文法的に正しいか、演技力や独創性はどうか、の5点としている。

5. あたたかみがある言語活動

コミュニケーションを機械的な情報の授受に終わらせず、お互いの人格を認めあい、人と人があたたかくふれあう場としたい。そのためには、機械的なドリルの後に、「その人らしさ」がでるような題材で言語活動を展開する。

たとえば、Book 1, Lesson 1 [2] (基本文: This is my ~.)では、機械的な口頭練習の後に、小さく切った画用紙を配り、今一番大切にしているものや気に入っているものを絵にして描かせる。その後、ペアやグループになり、次のように発表させる。

Hello. My name is Ito Koji. This is my family. Thank you.

1年の初期であり多くの英語を望むことはできないが、短いなりにも立派なメッセージが込められている。私は、全員を教室の前に出させ、ビデオカメラを教材提示装置代わりにして、絵をテレビ画面に映し発表させたが、教室中があたたかな雰囲気になった。

6. 個人の視点から題材を問い直す

冒頭の森住先生のことばからもわかるように、豊かなコミュニケーションの担い手は豊かな人間性を持っている。幸い、NEW CROWN は題材内容が豊かで、さまざまメッセージを我々に伝えてくれる。それらをただ受動的に受け入れ、知識として蓄積させておくだけでなく、常に自分と関連づけて考え直させたい。

たとえば、Book 1, Lesson 1 “My Name Is Kato Ken” では生徒自身が自分の名前を Kato Ken 方式

で言うのか、Ken Kato 方式で言うのか考えさせる。また Book 2, Lesson 4 “Computers in Future Schools” では、生徒それぞれが考える未来の学校、理想の学校を発表させる。

昨年度3年生を担当したが、Lesson 4 “A School Trip to Hiroshima” を学習したあと、佐々木禎子さんに関するNHKの番組を生徒に見せた。数日後、私のクラスで何人かの生徒が突然折り鶴を折り始め、クラス中に広がった。「何かをしなくちゃいけない衝動に襲われた。でも何をしたらいいのかわからないので、とりあえず鶴を折る」とある生徒が話してくれた。クラスの中には、「安っぽいセンチメンタリズムで折りたくない」といって協力しない男子もいたが、それでいいと思う。とりあえず、一人ひとりが自分と関連づけて考えた結果であるわけだから。

7. コミュニケーションのルールを教える

外国人とのコミュニケーションでは、文化の違いもあり、日本では自然なことでも、相手に不愉快な思いをさせてしまうこともある。当然その逆もあるはずである。

こういった事柄についても、意図的・計画的に教える必要がある。たとえば、Book 1, Lesson 5 で人称代名詞 he, she を学習した後に「he や she はその場にいない人を指すことばであって、その場に本人がいるのに She is from the USA. などと言うのは失礼だよ」と教えたい。ただ、われわれ英語の教師でもわからないことが多いので、ALTの助けが必要になってくる。岩波新書 No.215 J.V.ネウストブニー著『外国人とのコミュニケーション』も参考になる。

8. おわりに

以前、アメリカ人が人前で堂々と意見が述べられるのは、小学校の低学年から国語(英語)の時間に Show and Tell を通して話す訓練をしているからだ、と聞いたことがある。コミュニケーション能力の基礎・基本を教えていくためには、他教科との連携など広い視野で考えていかなければいけないということを、あらためて実感する。